

氏名	川上 若奈		
学位の種類	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 9508 号		
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	ゴーチエにおける芸術教育思想の特質 — 一人間形成論的側面に着目して —		
主査	筑波大学教授	博士（教育学）	吉田 武男
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	甲斐 雄一郎
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	田中 マリア
副査	岡山大学教授	博士（教育学）	尾上 雅信

論文の内容の要旨

川上若奈氏の博士学位論文は、近代教育制度の萌芽期である 19 世紀フランスにおいて、芸術教育に関して独自の思想を展開した、作家かつ芸術批評家テオフィル・ゴーチエにおける芸術教育思想について人間形成論的側面に着目して、芸術教育思想史の流れに位置づける可能性を提起することを目的にしたものである。その要旨は、以下の通りである。

本論文は 2 部構成をとっており、第 1 部では、ゴーチエの芸術教育思想の背景が論じられている。第 2 部では、ゴーチエの芸術教育思想の特質が、「芸術を手段とする教育」「芸術の教育」「芸術の教化作用」の三つの芸術教育の類型に従って明らかにされている。

序章では、著者は、芸術や美と、道徳及び教育との目的の関係の認識を曖昧にしたまま構築されている道徳教育の内容の問題状況を踏まえ、それを克服する第一歩として、芸術と道徳と教育の関係における新たな視点を得るために、道徳に役立つ芸術を推奨する思潮を断つ「芸術のための芸術」を主唱したゴーチエの芸術教育思想の特質を探究している。その際に、ゴーチエを対象とした研究は文学分野においてかなり行われているが、彼の芸術教育思想についての研究は教育学分野においてまったく本格的に検討されていないことを確認している。

第 1 部第 1 章では、著者は、芸術教育思想がどのように形成されていったのかを論じている。そこでは、ゴーチエの生涯が確認されたうえで、「芸術のための芸術」思想を提唱するに至った経緯が整理され、芸術教育思想をつくりあげていく過程が明らかにされている。第 2 章においては、著者は、ゴーチエの芸術教育思想の基盤としての彼の芸術観及び教育観について検討することを通して、変遷する美術の様式に対する彼の姿勢や、芸術家に必要な「ミクロコスモス」という概念に関して解説するとともに、人々と芸術との仲介による芸術への導きが、彼における人間形成の働きかけとしての教育の目的かつ方法であると指摘している。

第 2 部第 3 章では、著者は、「芸術を手段とする教育」に関する思想について論じている。そこでは、ゴーチエの「芸術のための芸術」思想の形成に影響を与えたとされるカントやクーザンの思想とともに、彼の生涯を通じた基本的姿勢となった、批評家をはじめ、ブルジョワ道徳やその有用性への批判的な思想が解説された。そのうえで、ゴーチエの「芸術のための芸術」思想においては、芸術とは従属的に道

徳的真理を表現するものでも、また直接的で実際的な有用性をもつものでもない、ということが『モーパン嬢』の序文から確認された。第4章では、著者は、「芸術の教育」について『家庭博物館』誌を用いて検討し、雑誌への寄稿文の中で、ゴーチエがどのように家庭における芸術の教育を行おうとしていたのかを明らかにしている。そこでは、まず『家庭博物館』誌は、「文学を民衆のものにする、すなわち精神の喜びによって道徳的改良を達成すること」を目的として創刊されたものであることを確認したうえで、その雑誌に寄稿されたゴーチエの「羊飼い」と「少女の枕」という二つの作品には教訓が含まれていることから、彼にとって家庭における「芸術の教育」は、道徳的な教訓を包含した子ども向けの文学作品を提供することであったと指摘されている。とりわけ、「少女の枕」の作品には、単なる教訓物語ではなく、色遣いの工夫を施すことによって作品を「文学」たらしめる美しさを加えようとしている点において、彼の「芸術の教育」に関する矜持が見て取れるものの、作品に教訓を含ませたことは、彼の「芸術のための芸術」思想に反すると解釈されている。第5章では、著者は、「芸術の教化作用」に関してのゴーチエの考えについて考察し、次の3点を明らかにしている。すなわち、第1に、彼にとっての批評は、美しさについて人々に説明し、分からせようとするものであり、かつ人々を良い絵画に導くことが批評家の務めであると意識していたという点、第2に、彼の応用芸術論を検討し、大衆の芸術への嗜好の涵養のために、美しい芸術を「絶え間なくみること」が必要であり、そのためには、芸術家が用途をもった芸術を制作し、人々の間に芸術を浸透させることが必要であるという点、第3に、彼が首席編集者を務めた雑誌『アーティスト』誌について検討し、これが、芸術を紹介するにとどまらず、人々を芸術に近づけ、人々の芸術への嗜好を養うことのできる媒体であったという点である。第6章では、著者は、ゴーチエにおける芸術教育思想の特質について整理している。芸術教育の三類型の中で、「芸術の教化作用」は、「芸術のための芸術」思想と矛盾せずに、芸術と教育とを結びつけることが可能になると指摘するとともに、ゴーチエの芸術教育思想の特質は、「芸術のための芸術」思想という実践的な理論を構築し、人々と芸術とを仲介する必要性を説いた点にあると指摘している。終章では、本研究の総括が行われ、著者は、自律的な芸術が却ってその性格により教育に対して効果をもつという芸術教育思想の流れの中に、その実践的な理論を提起した人物としてゴーチエを位置付けることができると結論づけている。

審査の結果の要旨

(批評)

川上若奈氏の論文は、教育学的な著作のないゴーチエを対象に、彼自身の著作のほとんどを網羅して吟味・検討の素材とし、その著作内容と発表媒体に関する詳細な分析から、彼の教育についての一定の考察を抽出しようとしたことは、一つの研究手法の試みとして評価できる。また、19世紀フランスの芸術思想の流れを実証的におさえながら、思想の内在的解釈のみならず、社会史・経済史研究の成果も広く援用して、時代背景ならびに思想形成との関連を探ろうとしている点も高く評価できる。さらに、芸術と道徳と教育の関係の認識という根本的な問題の解決に向けて、人間形成論的側面に着目して果敢に挑戦し、一定の学問的な成果をあげた点も、今後の道徳教育学研究にとって有意義であると高く評価することができる。

令和2年2月10日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。